贖罪の日

キー・ヴァース「第七の月の十日には、あなたがたは自分を捨て、どんな仕事もしてはならない・・・この日に、あなたがたのために贖いが行われ、あなたがたを清めるからである。そうすれば、主の御前で、あなたがたはすべての罪から清められる。"

レビ記16:29-30

厳選された聖典

レビ記16:2-9、11-19、27-34

今日のレッスンは、レビ記第16章に記されている、イスラエルで毎年行われる贖罪の日に行われる幕屋の礼拝に関するものである。この重要な礼拝は、ユダヤの宗教的な年の第7の月の10日に行われました。大祭司が至聖所（幕屋の一番奥の区画）に入り、国民の罪を贖う日であり、一年で最も厳粛な日とされていた。この特別な日の礼拝を執り行うために、大祭司アロンは通常の「栄光と美の衣」

、白い亜麻布の犠牲の衣を身にまとった。出エジプト記28:2-39; レビ記16:4

アロンは、贖いのいけにえのために雄牛と山羊を調達するように指示された。雄牛はアロン自身が用意し、自分とその家のための罪の捧げ物として幕屋の中庭で殺されることになっていた。雄牛の脂肪は青銅の祭壇の上で焼かれた。雄牛は脂肪が多いので、猛烈に燃えて、外にいる人の目には濃い煙が立ちのぼったに違いない。レビ記16:3、5-6、25

その後、アロンは香炉に火で燃やした炭を入れ、甘い香とともに幕屋の第一区画である至聖所に持ち込むことになっていた。その香炉を金の祭壇の上に置き、香を振りかけると、甘い香りの煙が立ちのぼり、第二のヴェールを越えて至聖所に至る。これが綿密に行われた後、アロンは安全に至聖所に入り、最後の贖罪の儀式を行うことができた。そこで彼は、雄牛の血を慈しみの座の上と前に振りかけるのである。

幕屋の外、幕屋を囲む陣営の外には、もう一つの火があるはずだった。そこでは、雄牛の下劣な部分（皮、肉、糞）が焼かれることになっていた。この場

面は、幕屋の周りに宿営していたイスラエル人全員が見ることができ、幕屋の中庭を囲む亜麻布のカーテンや、聖なる場所と至聖なる場所の閉鎖的な性質によって見えにくくなっていた贖罪の日の他の犠牲的儀式とは明確に区別された。こうして、雄牛のささげ物は完成した。

次に、罪の捧げ物のためのヤギがささげられた。このためにイスラエルの民の中から取り出され、幕屋の戸口で主の前にささげられた。主の山羊は幕屋の中庭で殺され、その血は至聖所に持ち込まれ、雄牛の血と同じように振りかけられた。その皮、肉、糞も同様に、イスラエルの宿営の外で焼かれた。

パウロは、「これらのことは、彼ら（イスラエル人）に起こった。それらは、時代の終わりに生きる私たちに警告するために書き記されたのです」。それらは「影であり、これから起こる良いこと（　　）のおぼろげな予告」であり、イエスを中心とする「より良いいけにえ」であった。1コリント10:11; ヘブル10:1; 9:23